

能代高

(8)

青春のうた

「おお、農村学生諸君よ、故郷を顧みよ。農村の現状を熟視せよ……」

村岡洋三(二期、元官吏)の演説は、いよいよヤマ場。聴衆を酔わせ、自分のペースに引き込む話しぶりも実に鮮やか。

精いっぱい気炎をあげた村岡は、最後のところを次のように結んだ。一段と声高らかに。

「彼の西欧において、滅亡に瀕しつつあった一小国デンマークが、一熱血漢グルンドウイツヒの奮起によって、如何に挽回され、如何に目覚ましい発展を遂げたか。而して今や世界に於ける農業国として如何に活躍し

つつあることか。おお、第二のグルンドウイツヒ出でよ！我等の故郷のために……」

大きな拍手。十分な説得力。文句のつけようがない。

「さすがは、村岡君だな」

畠山敏雄(同、元県議)は、壇上からおりてきた村岡の肩をたたいて、見事なできばえを絶賛した。

昭和六年二月、村岡は能中代表で全県中学弁論大会に出場。会場は秋田市記念館。我等の故郷を顧みよ」と題して雄弁をふるった。堂々の二位入賞。その時の演説は、いま聞いても、なるほど、そのとおりという内容だ。農村のかかえる問題が、昔もいまもちつとも変わらないためであれば、ちよつと悲しいが。

能中の弁論部を創設したのは村岡と畠山である。

「敏雄、そんなに小せ声だば大物になれねな」

中学生になりたてのころ、畠山はおじからそういわれて、一念発起した。弁論部でできたことが、後年、営林署長や県会議員になって役立った。学生時代は、何でもやっておくに限る。

現在は、二ツ井町でキリの木の増植運動に取り組んでいる。周りの人たちからこういわれるくらい。

「畠山先生だば、話のほうも、始めるとキリがねして……」

「とこころで——」

「確かに、政治家の素質みたいたのが、敏雄氏にはあつたすな」

同級の智田重恭(元不動産会社社長)が認める畠山は、文学使いとしても、学校内外に知れていた。

落日の 光薄れて落葉木に

夕煙たなびく 山の村かな

これは、畠山が四年生の時の作品。故郷の響村(現二ツ井町)の風景をうまく詠んだもの。

同級生で短歌や作文が一番うまいとされていたのは金子勝三郎(故人)。

ゆるやかに うねる砂丘のそ のかげを 白き日傘の 動きゆく見ゆ

など多数の作品を残した。

金子は、人にアダ名をつける特技があり、畠山のことを

「おい、ムツリーニ！」と呼んだ。

ムツリーニなら聞いたことがあるが、ムツリーニは初耳。

「それだば、おめえ、ちよつとひでえな」

抗議はしたものの、生まれつきおとなしい畠山は、とうとうムツリーニにさせられて……

“文学樽子山”という、名前

落日の 光薄れて落葉木に



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

がすばらしい（中身も）回覧雑誌を出したのは、四、五年生の時。下宿先の親せきにあたる女学生（庄内タキ）、工業学校の親友（直嶋常蔵）なども加わり、三校合同の作品集としてもてはやされた。

畠山には、本当は、女学生を恋する歌の一つも詠みたい気がしないでもなかった。だが、みんなから「聖人」とも呼ばれ、そのイメージを壊すのも惜しい。

山深み 雲のこみちを分け入れば 群笹に 雀鳴き居りと、もつばら花鳥風月でがまん。聖人のつらいところ。

文学樽子山“発行には、テニス部キャプテンだった高橋正十郎（故人）の果たした役割が、実際には最も大きかった。なぜならば、高橋は上小阿仁の財産家の息子。人がいいうえ、金回りもいい。印刷代のほとんどを

いやな顔一つせずに負担した。すずかけの 木陰を友と語りひて そそろ歩みぬ 山峡のまち

と、スポーツ同様に、歌も結構うまかった。卒業式が近づいてきたある日、高橋は、畠山にこういった。

「畠山よ、キミが優等で卒業するごつたば、オレも一番で卒業すど。だども、下から一番でや……」

その時のことを上手に詠んだ歌でもあれば、この話がぐつとしまるのだが……。 （敬称略）

